

「物の心」の史的考察： 本居宣長の「物のあはれ」（その1）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 武蔵野大学教養教育リサーチセンター 公開日: 2016-06-29 キーワード: 作成者: 水野, 雄司 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/174

「物の心」の史的考察

—本居宣長の「物のあはれ」(その1)—

水野 雄司

はじめに

本居宣長の「物のあはれ」論はあまりに周知である。それは、宝暦一三(1763)年、宣長34歳までの数年間に書かれた『紫文要領』『石上私淑言』の2冊で主に展開されたものである。例えば『紫文要領』の記述は次のようなものである。

たとへばいみじくめでたき桜の盛にさきたるを見て、めでたき花と見るは物の心をしる也。めでたき花といふ事をわきまへしりて、さてさてめでたき花かなと思ふが感ずる也。是即物の哀也。然るにいかほどめでたき花を見ても、めでたき花と思はぬは、物の心をしらぬ也。さやうの人は、ましてめでたき花かなと感ずる事はなき也。¹⁾

※傍線・傍点は引用者。以下同。

宣長の源氏物語論である『紫文要領』では、『源氏物語』の本質は「物のあはれ」にあるとし、そこでは当然「物のあはれ」について詳細な説明している。なお『石上私淑言』は、その『紫文要領』で構築した「物のあはれ」を歌の世界にまで敷衍したものである。

この宣長の「物のあはれ」で重要な役割を果たしているのが、「物の心」である。前掲の文章でも、人が満開の桜を見たときに「めでたき花」と感じるのは、そのような「物の心」が前提として存在するからだとしている。

『紫文要領』、そして『石上私淑言』のなかで「物のあはれ」を説明するために登場するこの言葉は、宣長が構築する物語論・歌論における、大きな特長のひとつといえる。また『石上私淑言』を未完で筆を置き、古事記研究へと向かう階梯を示す重要な言葉ともなっていると考えている。しかし、宣長の思想をみるにあたって、「物の心」を中心に論じたものは管見では見当たらない。

以上のことから、本稿では、「物の心」という語彙を、主要な古典作品における使用例を史的考察することで、その語義を検証してみたい。最終的には、その比較から、宣長の「物のあはれ」の特質明らかにすることを目的としている。

1. 琴を奏でる心——うつほ物語

日本文学史において「物の心」が最初に確認できるのは、『うつほ物語』である。それ以前の『古事記』・『日本書紀』・『日本霊異記』にはみあたらず、10世紀に入ってから、『竹取物語』や、伊勢・大和・平中の歌物語に使用例はない。

以降で考察するように、『うつほ物語』から『落窪物語』を経て、『源氏物語』では31箇所での用例がみられる。もともと宣長においては、源氏物語論である『紫文要領』で展開された言葉であることから、『源氏物語』の「物の心」使用例に強く影響を受けていると考えるのが自然である。これは「事の心」にもあてはまる。ただし問題は、宣長の「物の心」・「事の心」は、『源氏物語』のそれらとは、その意義や文脈において異なっていることである。そもそも宣長は、「物のあはれ」を定義するなかで「物の心」や「事の心」を登場させたが、『源氏物語』において、この用途では全く使われていないのである。

なぜこうした違いがあるのか。それを知るために、先ず、そもそも「物の心」とは、どのような意味の言葉であるかを、代表的な古典の用例を網羅的にみることで確認してみたい。

なお『源氏物語』以降は、『浜松中納言物語』・『狭衣物語』・『とりかへばや物語』、そして『今昔物語集』において、それぞれ少ないが使われている。中世に入ってから、『松浦宮物語』・『宇治拾遺物語』・『十訓抄』・『曾我物語』・『太平記』にもみられる。三大随筆では、『枕草子』・『方丈記』にはそれぞれ一箇所の事例があるが、『徒然草』にはない。日記では、『土佐日記』・『蜻蛉日記』にはみられないが、『紫式部日記』・『更級日記』にはそれぞれ一例づつ、歴史物語では『栄花物語』・『大鏡』に使用例がある。

なお「物の心」は、現在の辞典では、次のような定義がされている。

- A 物事の道理。世間の事柄や人情などの奥にある条理
- B 物事の情緒。自然や音楽・藝術などの持つ美的情緒。また、人間的真情²⁾

特に、主にAの意味の範疇で、現代でも使われる“物心がつく”とほぼ同義の用例が多く確認できる。子供から大人への移行期間において、幼児期を過ぎて、世の中のいろいろなことがなんとなくわかりはじめるという意味である。

それでは最初の作品として、『うつほ物語』をみていきたい。遣唐使船が難破したため、波斯国に漂着した俊蔭が、秘琴と弾琴の技を授かる。この物語は、そこから始まる親から子へ、子から孫への秘琴伝授が核となっている。そのために、子供が、琴を与え、技術を教えるに値する人物かどうかを判断することが重要になってくる。実際に俊蔭は、自分の娘（「俊蔭女」）に、次のように遺言している。

若しは、子あらば、その子十年のうちにみ給はむに、聡く賢く、魂とゝのほり、容面^{ようめい}、心、人に勝れたらば、それに預け給へ³⁾

琴を譲る条件として、知性、内面、容姿などが人に優れていること、しかも一〇歳という幼少期までにそれらを判断するようにと指示している。この条件のひとつに「心」が挙げられているが、『うつほ物語』における「物の心」の意味を考えるにあたって、幼いころに判断される秘琴伝授の条件は重要である。

この言葉を残して俊蔭は亡くなるのだが、その状況を描いているなかに、最初の「物の心」は出てくる。

心と身を沈めしほどに、ことに身の得もなく、久しくなりにしかば、まして一人の使人も残らず、日に従ひて、失せほろびて、物の心も知らぬ娘一人残りて、物恐ろしく、つゝましかれば、⁴⁾

もともと俊蔭は、娘が四歳になったときに、“賢く聡明に育った”として、波斯国から持ち帰った琴のひとつを与え、伝授を始める。俊蔭は、娘に対して、一〇歳どころか、四歳の時点で判断したことになる。そして、官位すらも辞し、娘と邸に籠もり、周りとの接触を断つかのような生活を送りながら、琴を教える。それでも娘が一二、三歳ころには、その美しさを聞きつけた多くの男性から結婚の申し込みがあるが、俊蔭は頑なに拒みつづける。そうしたなかで、娘は、一五歳になった年に、母と死別し、続いて父の俊蔭が逝き、乳母までが亡くなり、たった一人だけ残されてしまう。

したがって、ここの「物の心も知らぬ」というのは、世間から隔絶した生活を送ってきたために身につけることができなかつた、世間の事柄や常識ということになるだろう。生きるために自分ですべきことや、人に頼ることもわからない娘は、「有りやうにもあらず」⁵⁾ (人が住んでいるかどうかともわからない様子で)、貧窮のうちにひとり寂しく暮らすことになる。その後娘は、屋敷を訪れた藤原兼雅と一夜を契り、子(仲忠)をもうける。しかし落魄した生活は変わらず、零落の母子は人目のつかない山奥に生きる場所を求める。それが題名にもなっている「うつほ」での生活となる。

仲忠らが物の心も知らぬ、いかばかりかは悲しびたまひし⁶⁾

仲忠が、母と二人でうつほで暮らしていたころを回想している一文である。幼かったころの自分を「物の心も知らぬ」と表現し、その子供を抱えて、母はどれほどの悲しみを尽くされたことだろうかと嘆いてる。母とともに山に入ったのは、仲忠が五、六歳のころである。したがって、同じ「ものの心も知らぬ」という表現ではあるが、先の「俊蔭の娘」が一五歳であったことを考えると、少し意味は異なるだろう。ここでは、現代でも使う“物心がつく”とほぼ同義と考えられる。そして秘琴伝授は、仲忠の娘へと続いていく。

この年頃は月日も疾く過ぎなむ。物の心もしり給はば、心静かにて、さるべからん所を造りて、率て奉りて、習はし奉らんと、夜は眼を覚まし、昼はこれを思ひめぐらし侍ルに、……来年は七つになり給ふ。今までこれを教へ奉らぬ事。⁷⁾

仲忠が、娘であるいぬ宮に琴を教えることを、妻である女一宮に相談している場面である。翌年は七歳になる娘が、「物の心」を知るようになったら、琴を教えようと考えながら、一方で、この歳になるまで教えていなかったことに対して、遅すぎたのではないかと後悔に近い思いも吐露している。仲忠の母は、四歳から父俊蔭の伝授を受け、仲忠自身も、山中のうつほにて、六歳から母の教えを受け始めている。その母は、慎重になっている息子に対し

て、次のように述べる。

いと恐ろしうも物の心よう思知りたるさまにおはすれば、いとようひかせ奉り給てん⁸⁾

いぬ宮は、怖いほど「ものの心」を感じ取っているのです、上手に琴を奏でるであろうとして、はやく練習を始めることを薦めている。しかし仲忠は、

いかでかは、いと疾く習はせ給はム。物の心くはしく見させ給うひてこそ⁹⁾

と述べて、琴を習うためには、ただ早く教えればよいというものではなく、まず「物の心」を感じ取れるようになっていなければならないことを繰り返す。琴を教える賛否の中心に「物の心」が位置しているのである。

『うつほ物語』での「物の心」とは、先ず子供が主語となっており、現代でも使う“物心がつく”という意味が基本にある。しかし、それだけでは、ほとんどすべての子供に秘琴伝授の資格があることになってしまう。したがって、一般的な“物心”よりも、さらに深い意味が、そこになくてはならない。

それでは「物の心」とは、具体的にはどのようなことをいうのだろうか。仲忠が、いぬ宮に教えようとしている琴の弾き方について語っている部分があるので、少し長い引用になるが、抜き出してみたい。

春は霞ほのかなる鶯の声、花のにほひを思ひやり、夏のはじめ、深き夜の時鳥の声、暁空の景色、林の中を思ひやり、秋の時雨、夜の明かなる月、思ひへらの虫の声、風の音、色々の紅葉の枝をわかる、折のけしきを思ひ、冬の空さだめなき雲、鳥獣のけしきの、朝の雪の庭をながめ、高き山の頂を思ひやり、凍みたる池の下の水をあはれび、深き心高き思ひも、もろへの事を思ひあはせ、世の中のすべて千種にありと見ゆるものの覚ゆるもの、また時に従ひつゝ色衰へ、久しくなり、また空しくなりぬるものを、心に思ひつゝけて、琴の音に弾きそへむと思ひ、おなじく、手弾きはべればこそ、琴の音も弾くに従ひて響き、よろづの折にはあひ侍れ。¹⁰⁾

春は「霞」「鶯の声」、夏は「時鳥の声」「暁の空の景色」、秋は「時雨」「虫の声」、冬は「定めなき雲」「凍みたる池の下の水」などといった、四季折々の「千種にありと見ゆる物」を心に思い浮かべ続け、それを琴の音に加えようと思って弾くからこそ、どんな折にも寄り添うものとしている。実際に、仲忠のいぬ宮への秘琴伝授は、それぞれの季節に応じて行われる。

たとえば、二、三月のころの練習の風景は以下のように描かれている。

二月晦方よりは、なホ楼にて習はし奉り給フ。山の気色色づく見るもいとヲかしとて。三月節供。例のいと清らにて参り給フ。桜の花、かばざくらの花いとおもしろし。楼は

たゞ桜の花の中に包まれたり。いぬ宮一所、まめやかにておはすればにやあらん。いとこよなくおとなへしうなりまさり給フ。鶯の声いと近う、花にゐて鳴くを、琴をいとのどやかに、その声にあはせて弾き給ひつゝ、
鶯の花にむつゝ、声きけば こひしき人ぞ思ひやらるゝ
とひき給フを、大将、いと哀に聞き給へど、かしづき子は人にいとほづかしういと物恥をし給へば、たゞにおはす。¹¹⁾

冬から春に変わる時期、楼を囲む草花は色を変えていき、聞こえてくる鶯の声に合わせて、いぬ宮は歌と共に琴を弾いている。これはいぬ宮だけではない。山中のうつほにて、仲忠に母が伝授をした際にも、「春はおもしろき草への花、夏は清く涼しきかげに眺めて、花紅葉の下に心をすましつゝ、」¹²⁾と、季節に応じて練習が行われたことが語られている。

以上のことから、琴を弾くにあたって必要な「物の心」とは、「世の中のすべて、千種にありと見ゆる物の、覚ゆる物、また時に従ひつつ、色衰へ、久しくなり、またむなしくなりぬるもの」を感じることができる心ということになる。つまり、この世にあるすべてのもの、それらはその時々色褪せたり長く残ったり、または、この世からまったくなくなってしまふものなどさまざまであるが、それらを感じ取れる感受性である。したがって、そうした感受性が備わっている、もしくは将来的に身につけることができる可能性があると判断された場合に、「物の心、よう思ひ知りたるさま」として、秘琴伝授が行われるのである。

2. 異次元への感受性——源氏物語

これをふまえて、『源氏物語』の「物の心」をみていきたいが、その前に、ちょうど成稿時期としては、この二作品の間に挟まれる『落窪物語』の用例を確認しておく。ただし『落窪物語』には、「物の心」の用例はふたつしか確認できない。

ひとつは、「是物の心知るまで見んとおぼえし也」¹³⁾である。

落窪姫の異母姉妹である三の君が述べた言葉である。彼女は、意に沿わない相手との結婚など、現実の世界で遭遇する辛い出来事から、尼になることを決心する。しかし、子供が生まれることで、その愛おしさから吐露したのがこの気持である。“この子が「物の心知るまで」は、(尼にはならず)育てよう”という意味であり、“物心がつく”と訳せるだろう。

もうひとつは、落窪姫の継母、北の方の台詞にある。

北の方の夫である忠頼は、生前に落窪姫の夫である道頼にお世話になったことから、自分の遺産の大部分を、落窪姫夫婦に贈ることにする。しかし、忠頼の死後、道頼は、遺産をすべて受け取ることはせず、北の方やその家族に対しても好意的に対処する。それにもかかわらず、北の方が不満をもらして言ったのが、次の言葉である。

いさ。物いへば、ひがみたりとかしがましういへば、聞きにくし。よき事知り、物のこゝろ知りたらん人、推し量り申せかし¹⁴⁾

私が何を言っても間違っていると非難されるので、「よき事知り、物のこゝろ知りたらん人」にすべて取り計らってもらえばよいと述べている。つまり、正しいことを知り、「物の心」をきちんとわかっている道頼に、遺産の処分についてすべてまかせるといのである。もちろん本心ではなく、皮肉を込めて言っているのであるが、物事の常識や道理がわかっている道頼にすべてを託すとしている。『うつほ物語』と異なり、「物の心」の持ち主となる対象が大人であることは注目すべき点である。

『落窪物語』では、「物の心」は大人が持つものとして使われていること、そして『うつほ物語』では中心となっていた美的情緒という意味では全く使われてはいないことを確認して、『源氏物語』へとすすみたい。

関根賢司が、『源氏物語』に出てくる三一例の「物の心」という表現を検証している¹⁵⁾。現代の代表的注釈書である『新日本古典文学大系』（岩波書店。以降、「大系」）・『日本古典文学全集』・『新編日本古典文学全集』（共に小学館。以降、「全集」・「新編」）・『新潮日本古典集成』（新潮社。以降、「集成」）において、「物の心」が、どのように現代語訳されているかを確認し、その訳の限界を提示することで、「物の心」の深い語義を浮かび上がらせようとしている。たとえば、『源氏物語』桐壺の巻、主人公三歳の着袴の儀の場面である。

それにつけても世の譏りのみ多かれど、この御子のおよすげもてをはする御かたち、心ばへ、有がたくめづらしきまで見え給ふを、えそねみあえ給はず、物の心知りたまふ人は、かゝる人も世に出でをはする物成けり、とあさましきまで目をおどらかし給ふ¹⁶⁾

関根は、この「物の心知りたまふ人」を、「大系」は、「何らかの情緒を解される方」、「全集」と「新編」は、「物事の情理をよくわきまえておられる方」、「集成」は、「ものごとの道理がお分りの方」とそれぞれ現代語訳していることを紹介しながら、『物の心』は「何らか（もの、物事、ものごと）の情趣（情理、道理）」であるか、それに尽きているであろうか¹⁷⁾と疑問を呈する。

この場面での「物の心知りたまふ人」とは、普通の人々の判断においては誹謗される（「世の譏り」）存在である主人公の「御かたち、心ばへ」を、この世によくお生まれになったと肯定的に認識しうる人である。それはつまり、単純にこの世の現実の基準を十分に理解している人ということではなく、非現実、異次元の世界に対する感受、判断力を具えている人ではないかというのである。

他の用例もみてみよう。『うつほ物語』と同様に、何を感じるものが「物の心を知る」となると具体的描かれていないところなので、少し長くなるが引用する。

木高き紅葉の陰に、四十人の垣代いひ知らず吹きたてたる物の音どもにあひたる松風、まことの深山おろしと聞こえて吹きまよひ、色々に散りかふ木の葉の中より、青海波のかかやき出でたるさま、いと恐ろしきまで見ゆ。かざしの紅葉いたう散りすきて、顔のほひにけおされたる心地すれば、御前なる菊を折りて左大将さしかへたまふ。日暮かかるほどに、けしきばかりうちしぐれて、空のけしきさへ見知り顔なるに、さるいみじ

き姿に、菊の色々うつろひえならぬをかざして、今日はまたなき手を尽くしたる入綾のほど、そぞろ寒く、この世のこととおぼえず。もの見知るまじき下人などの、木のものと、岩がくれ、山の木の葉に埋もれたるさへ、すこしものの心知るは涙落としけり。¹⁸⁾

桐壺帝の朱雀院への行幸で青海波を舞う源氏の姿に対して、「もの見知るまじき下人」のなかでも、少し「ものの心知る」人は、感極まって涙を流したという。この「ものの心」について、「大系」の注は、「物事の情理をわかまえる意」、「全集」の訳は「物の心を感じる（新編、わかまえる）者」、「集成」の傍注は「ものの情趣の分かる者」と、それぞれあるが、関根は「いささか物足りなさを覚える」¹⁹⁾とする。

確かに、ここの源氏の舞への表現は、単に美しい、きれいであるといったものを超えた過剰さがある。この前に行われた試楽の舞ですら、一緒に舞った頭の中将を対比として「世に見えぬさま」²⁰⁾とあり、弘徽殿女御はすこし意地悪く「神など空にめでつべき容貌かな。うたてゆゆし」²¹⁾とのべる。実際に桐壺帝は、本当に神に魅入られないかと心配し、本番を迎えるまでに誦経などをさせた。引用した箇所でも、「いと恐ろしきまで見ゆ」や「この世のこととおぼえず」と形容され、「けしきばかりうちしぐれて」、つまり「空」ですら心を動かされて、時雨という涙を流したとある。

そうした光景をみて感涙するのが「ものの心知る」人ということになると、確かに、ただ現実的な常識や道理、眼に見える自然に関する美的情緒などを解する人と訳すだけで事足りるか、という疑問がわく。関根は、「霊異、非日常、非地上（この世）性に対する感受、顧慮」²²⁾を意味に込められないかと提案しつつも、現代語訳の限界を認めている。

もう一例みてみたい。源氏は、京を離れて、須磨で日々を送るが、三月上巳の祓えをきっかけに暴風雨がおこり、雷もおさまらなくなる。都の紫の上からの使者が「京にも、この雨風、あやしき物のさとしなりとて」²³⁾と語るほど、雨風や雷は収まる気配をみせない。このまま世は滅んでしまうような様子として、「風いみじう吹き、潮高う満ちて、浪の音荒きこと、巖も残るまじきけしき」²⁴⁾と表現される。そのため源氏も「先の世の報ひか、此世の犯しか、神仏明らかになりましたば、この愁へやすめたまへ」²⁵⁾と願を立てる。その効果があったのか、ようやく少し天候がおさまるものの、源氏にもこれからどうしたらいいかわからず、途方にくれる。そうしたときの源氏の心の内が次のように表現される。

近き世界に、ものの心を知り、来し方行く先のことうちおぼえ、とやかくやとはかばかしく悟る人もなし。²⁶⁾

危機的な状況のなかで、源氏は、自分の行く末を照らしてくれる人を切望しつつ、その不在を嘆いている。ここの解釈について関根は次のように述べる。

「神」「罪」「風」「空」「雨風」「物のさとし」「先の世の報ひ」「此世の犯し」「神仏」などなどの語句（表現）に圍繞され、それらの言葉（表現）を目覚めさせ喚び醒ましていとおぼしい場面、文脈のなかで、はたして「物の心を知り」は「物事に分別があり」

(全集)、「物事の道理をわきまえ」(新編)、「ことの意味を見抜き」(集成)という現代語訳で事足りているだろうか。²⁷⁾

確かに、この「ものの心を知」る人を、確かな知識と合理的な判断力をもち、それによって、現実的に状況を打開してくれる人と解釈することで充分であるかには疑問が残る。実際にこの後導いてくれるのは、ふとまどろんだ源氏の夢枕に立った故桐壺院である。

関根は、この他にも、薄雲、朝顔、夕霧などに出てくる「物の心」の用例を検証することで、「物」は、「物のけ」「物のさとし」の「物」と同じく、霊異、超自然、異次元の存在であり、「物の心」は、その気持、意思、意図ではないかとする。つまり「物の心を知る人」とは、単純に現実世界の常識や情感を理解しているということに留まらず、この世、地上、俗世の論理を超えた「非現実、異次元の世界に対する感受、判断力を具えている人」²⁸⁾と解釈すべきだという。そして、『源氏物語』における三一例の「物の心」のうち、多くの場合においては、現実の尺度である「物事の情趣」「情理」「道理」「分別」などの現代語訳で事足りるが、ここで紹介した事例を含めた九例においては、少なくとも、こうした別の視点の要請が必要であろうと結論づけている。

以上、関根の解釈を軸に、『源氏物語』の「物の心」をみてきたが、すでに確認した『うつほ物語』『落窪物語』と比較すると、どのような特徴があると言えるだろうか。

先ず、基本的に子供が主体ではないことがわかる。現代でも使う“物心がつく”という表現と同様に、幼児性からの脱却が基本的な意味として『うつほ物語』には存在していた。確かに、『源氏物語』にも数例存在する。しかし、『源氏物語』では、子供から大人への移行という文脈で使われることは少なく、その主体は大人である。また、その中身はどうだろうか。『うつほ物語』『源氏物語』とも、物事の常識や道理という意味に加えて自然を中心とした美的情緒を解する心として用いられている。仲忠が、いぬ宮に教える琴の弾き方と、源氏の青海波の描き方には、琴と舞の違いはあれども、芸術へと昇華する自然の美への感受性という点では共通するものといっていいたいだろう。

なお関根は、宣長の「物の心」には言及していない。したがって、『源氏物語』の「物の心」を踏まえたうえで、宣長が、どのような意味で「物の心」を使い、それによって、宣長の「物のあはれ」がどのような特徴を持つのかを明らかにする必要がある。

3. 王朝物語の「物の心」

『源氏物語』以降の「物の心」はどのようなものだろうか。先ず、平安時代後期に成立し、『源氏物語』の大きな影響が認められる王朝物語である『浜松中納言物語』・『とりかへばや物語』・『狭衣物語』を見ていきたい。ただし、前二作品では、次のそれぞれ一例のみしかみられない。

姫君、ものの心知るまで見ないては、かく聞こえさするみ吉野の山にも、さそひ聞こえたてまつりてむ。²⁹⁾ (『浜松中納言物語』)

君の御母と聞こえけん人は知り給へりや。大納言はいかゞの給うと問はせ給へば、やう
 へものの心知り給うふまゝに、いかに成給ひけんとおぼつかなく、³⁰⁾ (『とりかへばや
 物語』)

『浜松中納言物語』の「姫君」とは、物語の主人公(「中納言」と、今は尼となっている
 大君とのあいだにできた児姫君のことである。山籠りから帰ってきた中納言が、児姫君が
 「ものの心」を知るようになったならば、吉野の山にもお誘いしましょうと述べている。

『とりかへばや物語』の「ものの心」を知る人物は「若君」である。中宮が、母であると
 名乗りでることができない自分の息子(「若君」)に、父である大納言から母について、どの
 ように聞いているのかを尋ねている箇所である。この時若君は一一歳であり、徐々に「もの
 の心」を知るようになって、自分の母親はどうなってしまわれたかを気にしはじめていた。

『狭衣物語』では、六か所に使用例がみられるが、そのうちの五つを次に挙げる。

- ①やうやう物の心知りたまふまゝに、かからん人をこそ我が物にせめ、³¹⁾
- ②やうやう物の心知りゆくまゝに、この御様ならん人を見ばや、さらざらんこそ生けるか
 ひなかるべけれ³²⁾
- ③幼きほどこそ、さてもあらめ、物の心知り、大人びなば、あまた候ふめる中納言、宰相
 の君などのつらにてこそはあらめ、³³⁾
- ④かくなど、言ひ聞かせたてまつるべきやうもなければ、いとかひなし。いま少し物の心
 知りたまふまで、え見たてまつらずなりぬるよ。³⁴⁾
- ⑤御産衣や、昔の人の描きすさみたまへりし絵どもなどの、破り捨てんが惜しかりしども
 を、取り置いたりしなり。むげに、その人の御ありさまとて、聞かせたまはんことのは
 からんよりは、物の心知らせたまひなんに、御覽ぜさせん³⁵⁾

①と②はほぼ同じことを述べており、従妹の源氏の宮と、実の兄弟のように一緒に育てら
 れた狭衣が、だんだん「物の心」を知っていくうちに、宮を自分のものにしたいと思うよう
 になっていったという描写である。③の「物の心知り」の主体は、狭衣と飛鳥井女君との間
 に生まれた娘であり、素性を隠して育てられていることに関して、幼い今はまだいいが、
 「物の心」を知り、大人になっていくにつれて、身分の低いものと同列に扱われてしまうこ
 とを心配している台詞である。④の「物の心知らせ」の主体は、狭衣と女二の宮との間にで
 きた息子・若宮である。狭衣は出家の決意を固めたが、息子との別れだけはつらく、若宮に
 出家の理由を説明して、理解することができる歳ごろまで、そばにいることができないこと
 を悲しんでいる場面である。

⑤は、赤子のときに来ていた産着や、母である飛鳥井女君(「昔の人」)が描いた絵など
 を、娘である飛鳥井姫君が「物の心」を知ったのちに、見ることができるようにと残してお
 いたという台詞である。なお、この「産衣や、昔の人の描きすさみたまへりし絵」を実際
 に、飛鳥井姫君に見せた時の描写は次のようなものである。

いと心苦しき御けしきを、中将は、何しに御覽ぜさせつらん、今少し大人びさせたまひて、物のあはれも思しのどむばかりにてこそ、取り出づべかりけれとさへ思へど³⁶⁾

飛鳥井姫君は、母が残した物を見るにつけても、言葉にならないほど悲しくなり、その辛そうな様子を見た中将は、もう少し大人になり「物のあはれ」を知り、悲しみに耐えられるようになってから、これらの遺品は見せるべきだったと後悔している。つまり⑤と並べて考えると、「物の心」と「物のあはれ」は、ほぼ同義のように使われていることがわかる。

以上、『源氏物語』の影響が認められる『浜松中納言物語』・『とりかへばや物語』・『狭衣物語』の用例をみてきたが、基本的に子供が主体となり、今でも使う“物心がつく”とほぼ同義に使われていることがわかる。ここには『源氏物語』にみられた、非現実的な世界を視野にいれた、大人の感受性や判断といった側面はない。

4. 「あはれ」との遭遇——『栄花物語』

子供を主体とした「物の心」を考えるにあたって、『栄花物語』の次の記述は明快である。

さるべき殿上人、上達部絶えず、この殿ばらもさぶらひたまへば、いみじくあはれに悲しくなん。ものの心知らせたまへる宮たちは、御衣の色などもいとこまやかなるもあはれなり。³⁷⁾

村上天皇の皇后であり、冷泉・円融天皇の母である安子の四十九日法要の様子を描いた場面である。「ものの心知らせたまへる宮たち」とは、八歳以上の宮たちのことである。「五の宮は五つ六つにおはしませば、御服だになきを」³⁸⁾ (守平親王はまだ五、六歳でいらっしやつたので、喪服に服せられることまではなさらないが) という記述もあり、『源語秘訣』では延喜七(九〇七)年と延長四(九二六)年の勸申を引用し、七歳以下の子は親の喪に服する必要のないことを指摘している。それを『栄花物語』では、「ものの心知らせたまへる宮たち」と表現していることから、「ものの心」を知っているのは八歳以上であり、七歳以下の子供は「ものの心」を知らないと定義しているともいえる。この例は、これまで確認してきた、子供が主体となり、今でいう“物心がつく”として使われている例である。しかし、『栄花物語』には、宣長の「物の心」を考えるにあたっての、重要な用例がある。

世の人、この殿の御有様を、あるは、あしうしたまへれば、ことわりと言ふ人もあり、またすこし物の心知りたる心ばへある人は、かの御身にては、おはしたるにくからず。母の死ぬべきが、われを見て死なん、われを見て死なんと、寝ても覚めても言はむを、身はいたづらになるともなど思はずにこそはあらめ。あはれなることなりや³⁹⁾

藤原伊周(「この殿」)は、花山天皇に対して弓を引いたとして、罪に問われ配流された。

しかし、死に瀕している母に会うために、配所から密かに入京し、対面はかなったものの捕らえられる。そのことに対して、世間の人の反応が書かれた箇所である。“悪いことをしたので仕方がない”という人がいる一方で、「すこし物の心知りたる心ばへある人」は、臨終に近い母が、もう一度会いたい、一目会って死にたいと言っているのならば、自分の身が破滅することになっても実行することは、「あはれなること」と評価する。したがって、ここでの「物の心」を知る人とは、物事を杓子定規に善悪で考えるのではなく、「あはれなること」で判断できる人ということになる。

同様に、次の用例も、「物の心」と「あはれ」の結びつきをみせる。

曇なくめでたきに、続きたちたる御有様などもいみじうこそ。夜もすがら、人々、所の御有様、女房の衣の色さへ見えわかるる月なれば、おのづからものの心知りたる人はあはれに堪へがたく、よの常なきことをさへ、とり重ね思ひつづけて、女房の車を見て思ひけり

藤衣かへすがへすも悲しきは涙のかかるみゆきなりけり
花紅葉折りし袂を今はとて藤の衣を着るぞ悲しき
などぞ、人知れずわが心どもをやりける。⁴⁰⁾

藤原道長の娘、妍子^{けんし}の葬式の場面である。御車に御柩を載せて、お供の女房たちは、普段の衣装である菊襲や紅葉襲などの上に、喪服の藤衣を重ねている。そうした衣装がはっきりと見えるほどに、月は明るく、その光の下ははっきりと葬式の様子が見えるからこそ、なお一層悲しみがつのるのである。とくに「ものの心を知りたる人」は、こうした悲しい情感「あはれ」に耐えられず、歌を読んでほそかに自身の心を慰めたとある。

ここでも、「あはれ」を感じ取ることができる人が、「ものの心を知る人」ということになっている。これより以前に、『源氏物語』も含めて、この二つの単語が同じ文脈で使われたことはない。宣長の「物の心」は、「物のあはれ」を説明する言葉であることが大きな特徴となっていることから、この用例は、ひとつの分岐点といえるかもしれない。ただし、これ以降、中世に入ってから、「物の心」と「あはれ」の関係は定着することなく、基本的にはやはり子供から大人への脱皮の心として使われていく。

5. 中世の「物の心」

- ・予ものの心を知れりしより、四十あまりの春秋を送れる間に、世の不思議を見る事、や、度々になりぬ。⁴¹⁾ (『方丈記』)
- ・物の心知りはじめてよりのち、この七十余年、日ごとに、かくのほりて、卒都婆を見奉るなり⁴²⁾ (『宇治拾遺物語』)

『方丈記』の文章は、二段落目の冒頭に位置しているものであり、この後自己の体験した

災害の数々、大火、辻風、遷都、飢餓、地震などを年代順に記していく。『方丈記』が成立したのは、建暦二（1212）年であり、鴨長明五七歳の頃である。一六～一八歳頃に「ものの心」を知ったとするならば、そこから「四十あまりの春秋」を送ったということになる。

同様に、『宇治拾遺物語』のほうでも大体の年齢を推察することができる。「唐に卒塔婆血つく事」と題されたこの話は、山の頂上に大きな卒塔婆が立っており、日に一度、必ずこれを見に来る「年八十ばかりなる女」がいる。その道筋は、険しく急で、距離も遠いにもかかわらず、雨でも雪でも、どんなに暑い日でも、一日も欠かさず登ってくる。周りの人がそれを見に来る「年八十ばかりなる女」がいる。その道筋は、険しく急で、距離も遠いにもかかわらず、雨でも雪でも、どんなに暑い日でも、一日も欠かさず登ってくる。周りの人がそれを見に来る「年八十ばかりなる女」がいる。その理由を聞いた時の答がこの一文である。今八〇歳であり、「物の心知り始め」てから「七十余年」ということは、実際に山に登ることができる年齢も考慮すると、だいたい一〇歳前後のことと考えられる。

ただし、『宇治拾遺物語』には、次のような使われ方もある。

- ・いかでか心にいらんと思たる郎等の、物もおほえが、「いみじく侍なん。いかでか、あぢはひまさらぬやうはあらん」など、はやしいひける。すこしものの心しりたるおのは、あさましきことをもいふなど思ける。⁴³⁾「三河入道、遁世の事」
- ・(女が) こゑをたてて泣けば、男も、空寝して聞きしに、女にとらせつる袴にこそあんなれと思ふがかなしくて、同じやうに泣く。郎等共も、物の心しりたるは、手をすり泣きけり。⁴⁴⁾（「越前敦賀の女、観音助け給ふ事」）

この二つは、全く異なる話であるが、「物の心知りたる者」は「郎等」であるという共通点がある。前者は、三河入道（大江定本）が、雉は、生きたまま肉を切り分けたいほうが、新鮮で味がよいのではないかと提案した際の、従者たちの反応である。何とか入道に気に入られたい（「いかでか心にいらん」）と思っている人は、それは結構なことに賛成するのに対して、「物の心」を知っている従者は、残酷なことを言うものだと感じる。このようなことを提案した定本の理由は、「やがてその日国府をいでて、京にのぼりて法師になりける。道心のおこりければ、よく心をかためんとて、かゝる稀有の事をしてみける也」⁴⁵⁾、つまり仏道心が起こったので、それを確認するために、残酷なことをあえてしたという。なお、この出来事を通して心が固まった定本は、京で法師となる。

後者では、両親を亡くしてしまい、どのようにして暮らしていいかわからず、途方に暮れていた「女」のもとに、昔家で働いていた女性の娘と名乗る人が訪ねてきて、あれこれと世話を焼いてくれるというエピソードが語られる。引用をしたこの場面は、実はその娘は、姿を変えた観音様であったことがわかったときの描写である。助けられた「女」や、その夫である「男」はそのありがたさに涙する。そして、その「男」に付き従っている「郎等ども」の中でも、「物の心」を知っているものは一緒に泣いたという。これは、『今昔物語集』にも全く同じ話があり、そこでも「物の心」という表現は使われている。

これらの「物の心」は、具体的には、雉を殺すことに哀れみを感じることや、菩薩のありがたさをしみじみとすることができる心ということになる。仏教説話であることから、二つとも“仏道心”と言い換えることができるかもしれない。ここには子供という視点はない

一方で、「郎等」が主語となっており、基本的に身分の低い人間は、「物の心」を知らないという前提がみてとれる。

最後に『太平記』の唯一の用例もみておきたい。

是を聞いて時の変化をも計らぬ者は、「穴ことへし、何程の事かあるべき。唐土・天竺より寄来たと云はゞ、げにも真しかるべし。我朝秋津嶋の内より出て鎌倉殿を亡ぼさんとせん事蟻螂車を遮へぎり、精衛の海を填めんとするに異ならず」と。物の心をも弁へたる人は、「すはや大事出来ぬるは。西国・畿内の合戦いまだ静まらざるに、大敵また藩籬の中より起れり。是伍子胥が呉王夫差を諫しに、晋は瘡にして、越は腹心の病也と云ひしに異ならず」と恐れあへり。⁴⁶⁾

ここでは新田義貞が、鎌倉攻めのために挙兵したことに対する人々の反応が描かれている。「時の変化をも計らぬ者」は、弱小な者が、自分の力量を考えずに強者に立ち向かっているようなものとして、義貞を相手にしていない。一方、「物の心をも弁へたる人」は、これは一大事であると恐れている。「時の変化をも計らぬ者」と「物の心をも弁へたる人」は対になっており、時世の移り変わりや現在の情勢をきちんと理解しているかどうか軸になっている。ここには美的情緒という観点はほとんどないことがわかる。

おわりに

以上、近世にいたるまでの主要文学作品の「物の心」をみてきた。幼少期における“物心がつく”という文脈を基本としながら、『うつほ物語』や『源氏物語』では、あるべき自然の見かたや物事の捉え方を「物の心」として提示していた。また、『栄花物語』では、「あはれ」との関係する事例があり、そこでは、「物の心」を知る人とは、「あはれ」を感じ取る人として使用されていた。

以上のことをふまえて、本居宣長の「物の心」から構成される「物のあはれ」の特徴を明らかにしていきたいが、紙面の都合上、次稿にまわしたい。

宣長の「物の心」は、それ以前の使用例とは異なり、“物心がつく”という意味合いはほとんどない。また『うつほ物語』や『源氏物語』では、「物の心」を知ることは、そのまま豊かな感受性を手に入れることであったが、宣長は、知識の獲得（「物の心」）と、感受性の発露（「物の哀」）を、明確に分断して使用している。

こうした観点での考察は、宣長の「物のあはれ」論の本質に加えて、そこから繋がる古事記研究を中心とする古道論への階梯を明らかにすることに繋がると考えている。

註

- 1) 『本居宣長全集』第四巻、57頁
- 2) 『日本国語大辞典 第二版』小学館、2003年。A、Bの記号は、本稿の便宜上、引用者がつけた。

- 3) 河野多麻校注『日本古典文学大系 宇津保物語一』岩波書店、1959年、56頁
- 4) 前同
- 5) 前同
- 6) 『日本古典文学大系 宇津保物語二』岩波書店、1961年、387頁
- 7) 『日本古典文学大系 宇津保物語三』、岩波書店、1962年、393～394頁
- 8) 前同、397頁
- 9) 前同、421頁
- 10) 前同、394頁
- 11) 前掲『宇津保物語 三』、474～475頁
- 12) 前掲『宇津保物語一』、83頁
- 13) 松尾聡・寺本直彦校注『日本古典文学大系落窪物語 堤中納言物語』岩波書店、1957年、192頁
- 14) 前同、218頁
- 15) 関根賢司「源氏物語〈物の心〉攷」『國學院雑誌』第一〇〇卷第六号、1999年)
- 16) 阿部秋生・今井源衛・秋山虔・鈴木日出男校注、訳『新編日本古典文学全集 源氏物語 (1)』小学館、1994年、21頁
- 17) 前掲「源氏物語〈物の心〉攷」、67頁
- 18) 前掲『新編日本古典文学全集 源氏物語 (1)』、314頁
- 19) 前掲「源氏物語〈物の心〉攷」、68頁
- 20) 前掲『新編日本古典文学全集 源氏物語 (1)』、311頁
- 21) 前同、312頁
- 22) 前掲「源氏物語〈物の心〉攷」、68頁
- 23) 前掲『新編日本古典文学全集 源氏物語 (2)』、224頁
- 24) 前同、225頁
- 25) 前同、226頁
- 26) 前同
- 27) 前掲「源氏物語〈物の心〉攷」、69頁
- 28) 前同、67頁
- 29) 池田利夫校注、訳『新編日本古典文学全集 浜松中納言物語』小学館、2001年、324頁
- 30) 大概修、森下純昭、今井源衛、辛島正雄校注『新日本古典文学大系 堤中納言物語 とりかへばや物語』岩波書店、1992年、349頁
- 31) 小町谷照彦・後藤祥子校注・訳『新編日本古典文学全集 狭衣物語 一』、20頁
- 32) 前同、29頁
- 33) 『新編日本古典文学全集 狭衣物語 二』、2001年、60頁
- 34) 前同、201頁
- 35) 前同、393～394頁
- 36) 前同、395頁
- 37) 山中裕・池田尚隆・秋山虔・福長進校注、訳『新編日本古典文学全集 栄花物語 (1)』小学館、1995年、46頁
- 38) 前同、47頁
- 39) 前同、264頁
- 40) 『新編日本古典文学全集 栄花物語 (3)』、1998年、137頁
- 41) 市古貞次校注『方丈記』岩波書店、1989年、10頁
- 42) 『日本古典文学大系 宇治拾遺物語』岩波書店、1960年、111頁

- 43) 前同、165 頁
- 44) 前同、268 頁
- 45) 前同、165 頁
- 46) 後藤丹治・窯田喜三郎校注『日本古典文学大系 太平記一』岩波書店、1960 年、323～324 頁